

意識の中心 1991年 平河出版

ジョン・C・リリー

カリフォルニア工科大学で生物学と物理学の学士号を得て卒業後ペンシルベニア州立大学で医学を学ぶ。電極を用いた脳の基礎研究により、猿の快感や苦痛の中枢をつきとめ、マン・マシン・インターフェイスの先駆けとなる。その後アイソレーション・タンクを用いた感覚遮断の実験で意識の深層に興味をもち、LSD、その他のドラッグやノン・ドラッグのテクニックを用いて意識の研究にあたる。イルカの研究でも著名。

これは、いわゆる人生の意味を求める、約56年間に及ぶ私の個人的な探求の物語である。ある時は精神分析の研究において、またある時は脳研究、孤独の実験、対人関係の調査といったものによって、私は、一筋の真実、リアリティの脈絡、つまりは一筋の意味の脈絡を見出してきた。時に、その脈絡は見失われはしたが、それは新たな文脈、新たな場所、新たな空間、新たな意識の状態の中に姿を現すためにほかならなかつた。そうかと思うと、その脈絡が誰とも共有できない、特異な、私だけの想像の産物ではないかと感じることもあった。しかし私は、折にふれ、他の人々もそれぞれ別個に、同一もしくは同様な真理の脈絡を見出していることを発見してきた。他人によるこうした確証は、心強く、貴重なものだ。なぜなら、そうした確証がなければ人間は一人ぼっちで孤独だからである。他人との合意がなければ、人は確信をもてず、迷ってしまう。

私は、アメリカの若者が「ぶっ飛んだ」ところと呼ぶ、どちらかというと尋常ではない、非日常的な意識状態、空間、次元、リアリティの中で多くの時間を費やしてきた。極東や近東では、それらはさまざまな名称——たとえば「サトリ」とか「サマーディ」という用語がよく使われる——で呼びならわされている。サイケデリック物質が、悪夢の製造器や秘教的な秘薬としてではなく、有効な道具とみなされるようになってからまだそれほど久しくはないが、そうした状況の変化がなかつたら、私は本書を書く気にはならなかつただろう。十分な情報をもってはいたが、それをもとに本を書く時機はまだ到来していなかつたのだ。今や、その時機が到来したように思われる。私には準備ができているし、必要な聞き手もいるようだ。

本書の執筆中、私はいくつかの新しい地図と空間を発見したが、それらをここで共有したい。私はまた、東洋の神祕的な文献で述べられている、巨大な空間のほとんどに自分が入りこんだことを発見した。ただし東洋の文献に見られる知的な「お荷物」や、手のこんだ安全保護プログラムなくしてだが。サトリ、サマーディ、あるいはニルヴァーナといったものは、言葉によって説明しうるいかなるものをもはるかに超えた広大な意識状態の広がりを含んでいる。高いレベルのそれぞの体験は、自己の広がりや、自己によってじかに知覚しうる宇宙の広大さを確信させてくれる。

本書において、私は、最も高い意識状態、サトリ——サマーディの状態に行ったことがある一人の人間として、また興味ある人々に、こうした状態を報告するためにそ

これから戻ってきた人物として、話そうと思う。こうした最も高いレベルに行き、そこにとどまつたままの人もいる。戻ってきて、教えを説いた人もいる。ごく少数だが、ある人々は戻ってきて、それについて書きあらわした。かと思うと、そうした場所から戻ってきても、恐怖や恐怖や罪の念にかられるあまり、教えを説くことも報告することもできず、そうかといってそこに再び帰っていけない人たちもいる。

あるいは、こうした高いレベルに行ったことがないのに、こうした状態や、いかにすればこうした状態に達することができるかについて書いては書き直している人たちもいる。私の見るところでは、これらの文章はなんの役にも立たない。むしろ邪魔だと思う。私自身の意見では、そこに行ったことのある人だけが、直接的な教え、たとえば、著述、確認といったものによって、役に立つことができるのである。私自身の旅においても、他人からの確証が、役に立つものであることを私は発見してきた。

私がここに報告するような体験は、少なくともアメリカの若者たちの間では、ありふれたものになりつつある。最終的に反サトリ的プログラムを解決し、ほぼそれをルーティン化している多くの年配者もおそらくいるだろう。若者の多くは、うまく反サトリ的プログラムを回避し、ほとんどの時間を高い肯定的な状態で過ごすことに成功している。

人類の生存のためには高い意識状態の体験が不可欠である、というのが私の確固たる信念である。もしもわれわれが各自、せめて低いレベルのサトリを体験できるならば、われわれはこの惑星を爆破したり、われわれの知る生命を絶滅させたりはしないという希望がもてる。もしこの惑星上のすべての人々、とくに体制の権力の座にある人たちが、ゆくゆく定期的に高いレベルないし状態に達することができるようになれば、この惑星は、比較的単純な効率性と喜びによって運営されるだろう。そうなったあつきには、環境汚染、人間以外の種の虐殺、過剰生産、自然資源の誤用、人口過剰、飢餓、病気あるいは戦争といった問題は、実現可能な手段の合理的な適用によって解決されるであろう。

脳や心(マインド)や精神(スピリット)の活動に関する古い諸理論は、適切なものだとは思えない。特殊な体験が個人や集団に及ぼす効果を適切に判断しうるようになるには、ものの見方や理論、さらには体験のレベルで、われわれは数々の進歩をとげる必要がある。本書の中で、私は超意識や拡大した自覚状態の、捉われのない開かれたメタ理論を紹介する。この研究は、これらの領域における将来の研究を導く助けになってくれるかもしれない。この研究が、予備的な地図として役立てば幸いである。

LSDによる個人的な諸体験を、孤独——隔離——監禁の状態、変性意識の状態、個人的なサトリの状態、さらには否定的な状態もしくは空間における私の学習体験といったものと関連づけることが必要であるように思われる。時に、これらの報告は特異なものに思えるかもしれないが、概してそれほど特殊なものではない。宗教や神秘主義に関わる多くの著述家たちが似たような体験を報告している。

神秘的な状態、変性意識の状態、サトリ——サマーディ、LSDの状態といったものは、それぞれ、人間の脳と心の機能を扱う専門家たちのさまざまな理論を検証に付してきた。それらは、こうした状態を含めるためには現行の仮説を拡大する必要があることを証明してきた。

本書では、人間の脳は、その特性がまだ解明されておらず、完全にはまだ理解されていない巨大な生命コンピュータとして扱われている。集団活動における生命コンピュータ間の連繋もまた、未知の部分を含んでいる。ある種の個人や集団の場合には、いくつかの特性が一定の範囲内で特定できる。

このアプローチは、すべてが説明しうるという前提には立っていない。これは、閉じられた思考体系ではない。この思考テクニックを吸収し、自分自身の知的装備の一部となしうる人たちは、莫大な量の知的がらくたを掃除することができるだろう。このアプローチに対して準備ができており、十分な自己鍛錬を積み、適切なテクニックを用いる人たちは、自らの思考や感情や身体的な運動機能を明確にすることができます。

この生命コンピュータの考え方は、私自身の体験が深まるにつれ進化してきた。理論を検証・修正し、吸収し、自分、つまり自分自身の生命コンピュータの一部とするために、私自身を実験台にしたさまざまな実験が行われた。その理論が私の中に入り込み、私の「思考——感情」機構を再プログラムしたとき、私の人生は急速かつ根本的に変化した。新たな内的空間が開かれ、新たな認識とユーモアが現れた。そして、新たな疑惑が頭をもたげてきた。「私自身の信念は信じられない」と新たなメタ信念は言う。本文から引用してみよう。

心の領域においては、真理と信じられるのものは、体験的ならびに実験的に発見されうる限りにおいて、真理である、もしくは真理となる。これらの諸限界は、超越されるべきもう一つの信念である。心の領域においては、いかなる限界も存在しないのである。

以上が、LSD、瞑想、催眠、ゲシュタルト・セラピー、グループ・ワーク、夢の研究、孤独——隔離——監禁、その他いかなる手段を用いるにしろ、インナー・トリップをする場合に読者に伝えておきたい、重大なメッセージの一つである。

それが本書に書かれている内容である。

定義された意識の諸状態

オスカーは「サトリ」に関する独自の定義をもっていた。彼のサトリは、さまざまな肯定的レベル(+24、+12、+6、+3)、もしくは意識の状態として定義される。オスカーは意識の諸状態を特定するために、グルジェフィアンの振動番号を使用していた。表は、これらの種々の肯定的、否定的な振動レベルを表したものである。肯定的なレベルは、+3、+6、+12、そして+24である。48は中立レベルで、96、192、384、768の振動レベルは、それぞれ、-24、-12、-6、-3といった<反サトリ>の状態に対応している。

ほとんどすべての人が、彼らの人生において、時折、これらの状態の大半を自発的に体験する。このような体験の記憶は、レベル48の地図を作り出すことによって、活性化させることができる。地図作りはこうした状態への一つの道である。「ああ、確かに、前にそこに行ったことがある」というのが、他の状態から48に戻ってきた時に表現されるありふれた自覚である。次の点を強調しておきたい。これらの状態はま

グルジェフの振動レベル	意識の状態	サマーデイ	状態の説明
3	+3	ダルマ・メーガ・サマーデイ	救世主(マーディ)になる。古典的サトリ。宇宙的な心との融合、神との合一。頭上のマーの靈的センサーにおいて、無やらのエネルギーの創造者の一員になること。
6	+6	サスミタ・ニル・ビージャ	仏陀になる。意識、エネルギー、光、愛の点一源。意識の点、アストラル・トラベル、透聴の旅、透視の旅。時間の中での他の実体との融合。頭の心的センター(バス)
12	+12	サーナンダ	至福状態。キリストになる。グリーン・クトゥーバ。バカラの実現。神の慈悲の受容。宇宙的愛。宇宙的エネルギー。高められた身体的自覚。身体的意識と地球意識の最高の働き。恋に陥ること。肯定的なLSDのエネルギー状態に入りこむこと。胸にある感情センター(オス)
24	+24	ビチャラ	専門家のサトリあるいは基本的サトリのレベル。必要なプログラムのすべてが生命コンピュータの無意識内にあり、円滑に機能している状態。自己はおのれが最もよく知っていて、やりたい楽しい活動に没頭している。下腹部の運動センター(カス)
48	±48	ヴィタルカ	中立的な生命コンピュータの状態。新しい観念の吸収と伝達の状態。新しいデータとプログラムの受容と伝達の状態。肯定的でも否定的でもない中立的な状態で、教えることや学ぶことを最大限に促進すること。地上。
96	-24		否定的状態。苦痛、罪の意識、恐怖。しなければならないことを、苦痛、罪の意識、恐怖の状態ですること。いささかアルコールを飲みすぎた状態。少量の阿片を服用した状態。睡眠不足の第一段階。
192	-12		極端に否定的な身体的状態。強烈な偏頭痛の発作など、人はまだ身体の内部にいるが、意識は萎縮し、禁じられ、自覚は苦痛を感じるらめにのみ存在する。仕事や日常的な義務をこなせないほど苦痛はひどい。自己の上に制限が課せられ、人は孤立させられる。ひどい内的状態。
384	-6		極端に否定的であるということを除けば、+6に似ている。煉獄に似た状況で、人は意識やエネルギーの点一源にしかぎなくななる。極端な恐怖。苦痛、罪の意識。顕著な無意味さ。
768	-3		宇宙に遍在する他の実体と融合するという点では+3に似ているが、それらは最悪である。自己は悪で、意味をもたない。これは悪の典型であり、想像しうる最深部の地獄である。これは永遠につづくかに思われるきわめて高いエネルギー状態でありうるが、地球の時計ではほんの数分そこにとどまっているにすぎない。そこから逃げ出せる望みはない。人は永遠にそこにとどまる。

されもなくわれわれ人間の遺産の一部であり、われわれの大半にとって到達可能なものだということである。

オスカーがわれわれに与えた、これらの振動番号や意識の諸状態に関する講義を聞くうちに、それまでの私の体験の多くがこれらの概念を用いて位置づけられうることが明白となった。たとえば、私の人生の大部分は、48の、学んだり、教えられたりすることで費やされてきた。また私の人生のかなりの部分を占める研究活動、イルカの研究、執筆等の活動の際には、私は24の状態で過ごした。時折、これらの活動に没頭している時、96(あるいは-24)に滑りこみ、少しも楽しくないにもかかわらず仕事を続行していたこともある。LSDによる最初のトリップの際には、主として+12の状態にいたが、その中で、神と共に天国に行った時には、+6の状態に入りこんだように思われる。

1964年の死に頻した昏睡状態の折には、+3と+6の状態に入った。ガイドとの出来事はすべてレベル+6の状態で起こった。催眠トリップは+6であった。私が体験した+3の出来事とは、われわれが通常知っている宇宙の外に自分が連れ出され、宇宙が

千億倍もの速さに加速されるのを見せられた時のものである。宇宙が創造され、膨張し、そして一つの点——虚無(ボイド)へと戻っていくのを見せられたのだ。創造者たちによってそこに連れていかれた私は、自分がその創造者たちの一員であることを知らされたのである。

私の偏頭痛の発作は、明らかに-12のレベルにあった。苦痛があまりにもひどく、愛とエネルギーによって拡張される+12とは対照的に、その痛みによって締めつけられたのだ。もう終わりかと思った1964年の近似死体験の際、私は、自分が-6に直行し、それから二人のガイドが+6に連れ戻してくれたことを発見した。バージン諸島でのLSDを使用したタンク内での体験の時には+6と-6にいた。私は、一つの点として、当時、私が「認識可能な肉食動物」と呼んだ巨大な実体のいる領域に入りこんだのだ。スプリング・グローブ州立病院においてサンディ・アニガードと共に行った、-3の「ガイドつき地獄旅行」のように、時に私は、きわめて長時間、マイナスの状態に閉じこめられた。オスカーの新地図は、私が行ったことのある場所を図示することを可能にし、物事の整理を容易にした。そのため私は、そうした体験を体系的に蓄積し、新しい光の下で考えることができるようにになった。

人間の生命コンピュータ

私は、自分が知っている種々の状態を自分自身の言葉で語りたいと思う。三人称や受け身風の語り口を頻繁に用いてはいるが、読者に意識の見取り図を与えるのは、「科学者—探究者」である私であり、見取り図は私自身が探究したものなのである。このようにして私は、一人称で与えられる自分自身の体験を説明するためのコンテキスト、すなわち背景を作っているのだ。ある意味で、非人称的な形で私が提供するものは、過去における、自分のためのメタプログラミングである。同時に、それは個人的説明を理解してもらうために提供された、現在のあなたのためのメタプログラミングでもある。

オスカー・イチャーソとの対話の中で、私は自分の論文『人間の生命コンピュータにおけるプログラミングとメタプログラミング』の内容を彼に紹介した。彼はその論文を読み、われわれはその論文について長々と話し合った。こうした討論のすえ、振動レベル48を、人が肯定的感情も否定的感情ももたずに、完璧に合理的に、自らの生命コンピュータを動かしている意識状態として定義するに至った。感情が中立状態であっても、エネルギーが高いということはありうる。この意識レベルでは、人はデータ、プログラム、メタプログラムを吸収する。自らの生命コンピュータの貯蔵庫に、新しいメタプログラムや観念を挿入する。また、他人に新しい観念を伝えながら48の状態にいることも可能である。自分が48の状態にいるかどうかを検証する方法の一つは、他人との相互作用を観察することである。もし、楽しい肯定的な意味でも否定的な意味でも、そこにあまり感情がなければ、その質がどうであれ、48のレベルにいる可能性がある。

自覚レベルの外にある生命コンピュータのそうした部分が、本当に48で作動しているかどうかを知ることが難しい場合もある。なんらかの自我のプログラムに捉われ、それと同一化している場合、実際には96以下のレベルにいるにもかかわらず、自我が「私は48のレベルにいるんだ!」と叫んでいることもありうる。48から+3までのレ

ベルに本当にいるには、正直でなければならず、そうしたレベルにいるふりをしてはならない。純粹な48の状態は、そうしたがらくたをほとんど含んでいないのだ。

人間の生命コンピュータの内部に、分離・解離した、あるいは断片化した状態で機能する個別的な制御システムがある場合、生命コンピュータの各部が異なったレベルにあることもある。たとえば一つの制御センターが192、それでもう一つが96、そしてもう一つが48にあるといった具合である。自己メタプログラマーはこれら三つの制御システムを行き来する場合もあれば、同時に、それらの一つ一つと同一化する場合もある。このような状態では、人間の生命コンピュータは、純粹に統一された状態とみなせるような統一段階にまだ達していない。

純粹な48(中立的エネルギー)の状態にいるためには、少なくとも、生命コンピュータの機構の大半が、中心となる一つの自己メタプログラマーの下に包括されるよう、分離した制御センターが統一、統合されなければならない。こうした統一を達成するには、心と身体が最高の状態に高められ、靈的な道が明確にされ、受け入れられる必要がある。

「最高の身体的状態」がなにを意味するのかを知っているとすれば、それがその人の身体的目標である。「最高の身体的状態」がどんなものかを個人的体験によって知らなければ、その人は純粹な高エネルギーがどんなものかを知ることができない。そのような場合には、イチャーソのいう「体操(ジム)」やハタ・ヨーガといった身体各部に働きかけるエクササイズに加え、厳しいジョギングなど、全身的なエクササイズをしなければならないだろう。「最高の身体的状態」がどんなものかを学ばなければならないとしたら、その人は、すでにそうした身体の祝福状態を体験した人たちよりも、長く険しい道を歩まねばならない。統一された48のレベルを達成するために、なぜこのような状態が必要なのだろうか?

貧弱な身体は、生命コンピュータを制御可能な穏やかな状態で高いエネルギー・レベルに保つためのエクササイズを日々、十分に行ってこなかったことを表している。貧弱な身体には、人をせわしなくさせる、制御できない衝動が存在する。的外れな時に顔を出す未知の欲求に駆りたてられて、うろついたり、無目的な行動をしたりするのである。

身体が貧弱な人の頭の中には、たくさんの心的な雜音が流れている場合がある。頭の中で、実際に絶えまなく自分自身や他人に向かって語りかけるのだ。身体が良い状態になるにつれ、この種の衝動的な内的活動や外的行動は、著しく減少する傾向がある。そして、48が統合・統一され、生命コンピュータの活用部分が広がる。概して、規則的な身体的エクササイズは、生命コンピュータの演算能力、プログラミング、衝動を統一する傾向がある。つまり、人はより全体的になり、より自己自身になり、自分自身の中の未知なるものや、他人の命令によって機能することが少なくなるのである。規則的なエクササイズを始めて数日もすると、ほぼ無意識のうちに、自らの生命コンピュータに対する制御能力が高まっていることに気づきはじめる。自己メタプログラマーが生命コンピュータのより大きい部分の制御を引き受けるのだ。この場合、逆説的に思えるのは、自分自身の身体や頭の中の雜音から自由になるために、あるエクササイズの規則やプログラムに従うということである。

身体的エクササイズによって48が改善されるように、48のレベルの生命コンピュータとその機能をさらに高めるには、他のエクササイズをしなければならない。振動レベル96以下のレベルは、自分自身の制御のきかない、分裂した活動の状態である。こうしたレベルでは、内部のなにかがその人自身の本性や宇宙の法則に逆らっている。自分を自分の本質から分かつようなことをしたり、そのようなことにさらされるのである。本質とは、人間、個人、身体、生命コンピュータに適用される、宇宙的法則の最高の表現である。

その人の48の状態が十分に組織された单一方向のものに統一される地点まで生命コンピュータに磨きをかけなければ、身体的エクササイズだけではなく、精神的なエクササイズも行わなければならない。文字通り、幾千もの、そのような精神的エクササイズが存在する。

ここで、生命コンピュータの異なった機能段階を示す表を掲げておきたい。この表自体、現代の科学と科学理論の用語を使って人間とはなにかを図示することによって人間を解放に導く、知的エクササイズである。

人間生命コンピュータの機構(シェーマ)

構造レベル	
10	未知なるもの
9	本質(エッセンス)のメタプログラミング
8	自己メタプログラミング
7	自我のメタプログラミング
6	(制御システムとは関係のない)メタプログラミング全般
5	プログラミング
4	脳の諸活動
3	物質的構造としての脳
2	物質的構造としての身体
1	(身体と脳を含む)すべての側面をもった外的現実

表を見ておわかりのおとり、私は未知なるものを最上位に置いた。これは、探究者としての私の立場を要約するものである。未知なるものとは、私を超えたもの、われわれを超えたもの、われわれの現在の理解を超えたものである。未知なるものは、われわれの内部と外部に、そして、こうしたことすべてと関連するわれわれのあらゆる観念の中に存在する。だから、人間の生命コンピュータとその働きを通して、未知なるものが最高なのである。私の推測では、現在、われわれの身体や脳や心、さらには靈の世界で起こっていることの1%の1/10もわれわれは理解していない。ある瞬間にある人が理解できるのは、自分自身、自分の外的現実、他人に内在するリアリティの1/1000にすぎない。自分の意識の中心からの距離が増すと、知識は漸進的に激減し、当人の知ることは少なくなる。もし、宇宙的ネットワークに同調し、意識的かつ機能的方法でそれらのネットワークの一部になることができれば、意識の中心からの

距離による無知の増大に関する言説はむろん不適切なものとなる。理解は限界づけられている。知識もまた限界づけられている。しかし、意識は、それが通常われわれの文化によって押しつけられているような、社会的合意によって成り立つ外的および内的な現実の中にあるところを超えて拡大されうる可能性をもっている。

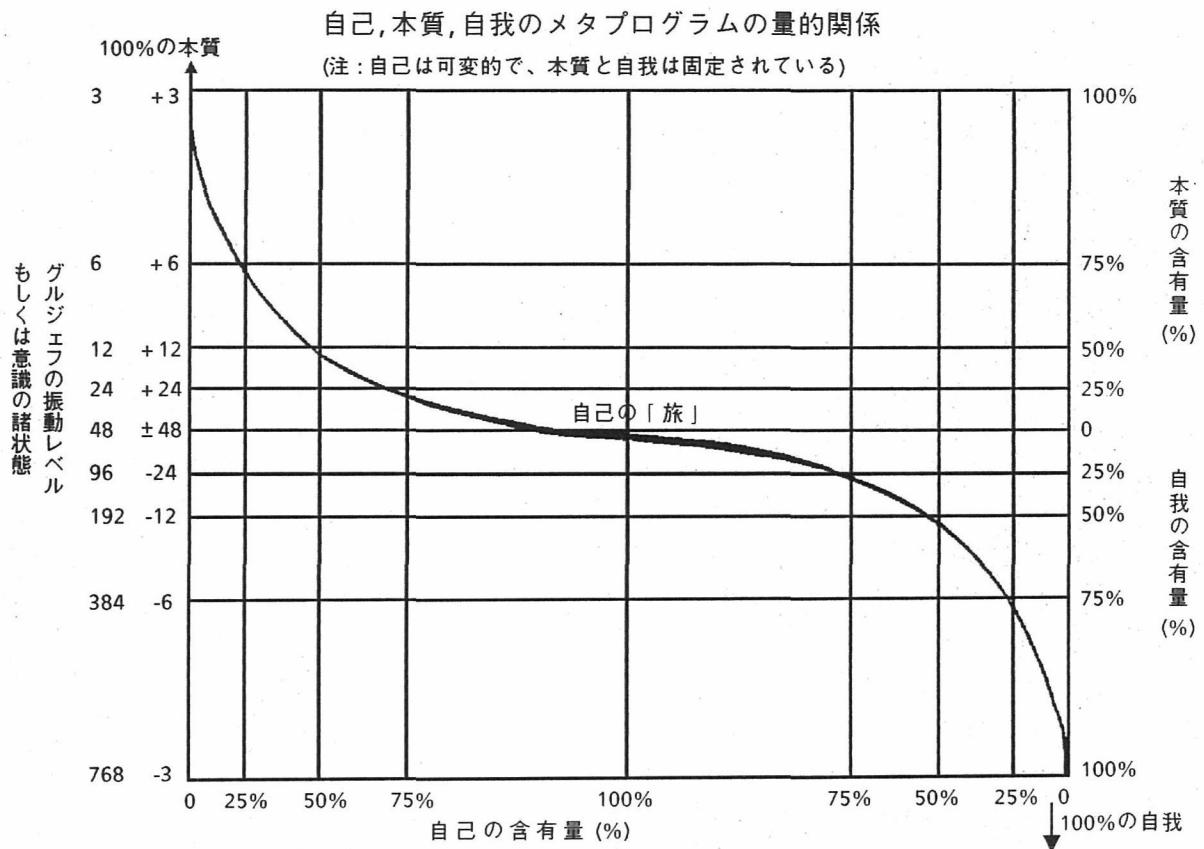
本質のメタプログラミングとは、最も肯定的な意識状態に導くものである。人が48のレベルにいる時、人間の生命コンピュータの中には、本質に結びついた諸観念が存在する。それらの諸観念は自己が生み出すものであり、自己が以前の経験から知っているものであり、絶対的、客観的リアリティであることを自己が確信しているものである。生命コンピュータによっては、こうしたメタプログラミングのレベルが、非常に微弱だったり、欠如している場合がある。

ここで役立つと思われる一つの考え方がある。肯定的レベルの実践的・体験的な体験によって、既定の生命コンピュータの本質メタプログラミングの力を強化できるというものだ。そうした場合、この既定の生命コンピュータは、徐々に、本質と本質のメタプログラミングの状態に入りこんでいけるようになる。そして、最終的に、自己メタプログラミングの努力を通じ、最も高いレベルの状態を構築・達成し、本質そのもの(本質のメタプログラミング)と同一化することによって、本質の内部に入りこんでいくことができる。しかし自己メタプログラマー、すなわち生命コンピュータが、本質のメタプログラミングを蓄積し終えるまでは、本質のメタプログラミングのレベルに入っていくことはできない。最初の幾度かにわたる、本質のメタプログラミングへの突入や、高い肯定性の状態の体験は、もし意識的になされ、十分、生命コンピュータの内部でモデル化され、蓄積されるならば、本質のメタプログラミングに戻る通路を提供する。

自己メタプログラミングの構造レベルと振動番号48のレベルは、私が今、読者に向けて書いている場所であり、読者が今、私の書いているものを読んでいる場所である。レベル48は、最も良い状態の自己メタプログラマーに特徴的なものである。人が中立的な行為者として、また、精神的プロセスの公正な目撃者として機能し、そうしたプロセスを再構成し、新しい情報の授受を行うところ、それがこのレベルである。肯定的な状態のレベルが、自己メタプログラマーの侵食を開始し、人がしだいに本質に近づくにつれ、自己メタプログラマーは消滅する。

構造レベル9すなわち本質のメタプログラミングにおいて、人は、振動レベル+3、+6、+12、+24の状態を獲得する。+24には、ごくわずかの本質のかけらしか含まれていない。状態3には、ほとんどの本質、いわば、99%の本質が存在する。したがって、構造レベル9において、われわれは、生命コンピュータの状態、つまり自己の意識的状態が、量的に徐々に本質の状態に近づいていくことを想像することができる。+3において99%の本質、+6においては75%、+12においては25%、+24においては5%、そして48においては1%の本質が存在する。けれども、ある意味でこれは、人間の生命コンピュータの過渡的な状態である。これらの本質の断片は、人が本質へと向かいはじめる時の初期の状態なのである。

自己メタプログラマーが、その進路を決定し、本質のメタプログラミングのレベルを発達させはじめると、「私は本質に向かって動いている。私は真の本質のリアリティを見るために自分の人生を工夫している。私は本質に向かうために必要なことな



らどんなことでもしようとしている」といったメタプログラミングを引き受けはじめる。肯定的状態は発達し、自己メタプログラマーは、本質のメタプログラマーへと移行する。そして、時間の過ごし方、一週間のスケジュールなどの問題のすべては、どれだけその人が、永遠の現在、真の本質の中に存在するかという問題になる。これは、地球上でのトリップのいかんにかかる実用的、実践的問題であり、48のレベルでは決定されえない。それは構造レベル8の、超自己メタプログラムとして、生命コンピュータに組み込まれるのである。

構造レベル7、すなわち自我のメタプログラムとは、48以下の否定的な振動レベル(-24、-12、-6、-3)である。自我のレベルは、自分が力強い独立した実体であり、ネットワークも、本質も、いかなる創造者の観念も、神秘状態も必要としないと思っているレベルである。あげればきりがないが、ここに私自身の自我のプログラムの例がある。「私は自らの身体の死をもって終わる。私は適切な時に、宇宙の適切な部分に存在した適切な分子の偶然の組み合わせから生まれた。いかなる創造者も存在しない。われわれを導く原理も、われわれを形作る法則も存在しない。いかなる本質も存在せず、ただ、エントロピーのゆるやかな増大によって宇宙の熱力学的な死に向かう熱の舞踏があるのみである。宇宙の再生はなく、最終的に宇宙は疲れ果ててしまうだろう。死後の生などというものは存在しない。われわれの意識のいかなる部分にも、永遠の生など存在しない。われわれの起源や、宇宙の起源を説明するものはなにもない。われわれは目的のない偶然にすぎない」

読者はこれらに、自分自身のリストからなにかを付け加えることができるだろう。あなたを振動レベル+48、+24、+12、+6、+3以下のレベルやその外に連れていくものはすべて、自我のプログラムである。あなたを支配する独立した否定的な制御シ

ステムはすべて自我のメタプログラムである。

自我を自分自身に対立するものとして理解することには、共通の矛盾が(パラドックス)が存在する。「落ちこみのプログラム」という意味での自我と、自分が自身の「パワー・トリップ」のために宇宙の法則やエネルギーを使う、独立した意志をもった、欲求する、力強い実体としての知識や感情という意味での自我との矛盾である。宇宙的なエネルギーや愛は、完全に公平で選択を超えていた。それらは(たとえばヒットラーのような)一個人によって用いられる場合もある。けれども、いったん、そういう仕方で用いられると、その特定の自我に多大な否定的結果がもたらされることになる。法則の中で生きること、流れの中で生きること、流れに乗ること、サトリのレベル、本質、宇宙の本質のネットワークに主導権を明け渡し委ねること、そうした態度こそ、永遠に、繰り返し人を破壊しつづけるカルマ(それを信じる人たちにとっての話だが)の蓄積に対する唯一の解毒剤である。本質を信じることに対立する、自我を信じることに固執するかぎり、人は自己破壊に奉仕することになる。その時、人は、もうもろの恐怖症や、宇宙の力によって迫害・処刑されるという正真正銘のパラノイアに振り回されるのだ。

私が-3のレベルで過ごした3時間は、きわだった否定的な強化によって、二度と再び-3の信念やそのレベルで機能することに戻りたくないということを明白にしてくれた。そのレベルにおける恐怖、パニック、苦痛は、あまりにも大きかったので、私の自己メタプログラマーは、二度と再び、そのレベルを私の生命コンピュータに押しつけるようなことはしないだろう。それとは対照的に、+3や+3の流れに身を任せることの報酬は実に素晴らしいものだったので、私はこの方向へ、否応なく導かれていくのだ。私を-3から押しやる力、そして+3の方向へ引きつける力は、巨大なものである。すなわち、それは私の生命コンピュータにおける本質のメタプログラミングの始まりなのである。-3への反発と、+3への傾倒は、最終的に、自己メタプログラマーの本質との同一化へと導くだろう。

死の恐怖は-3のレベルにあり、永遠の生の喜びは+3のレベルにある。ここで表現されている二分法は、自己メタプログラマーの特徴である。本質においては、そのような二分法は存在しない。人は-3と+3を同一のものとして見ることができる。唯一の違いは、本質の機能レベルにもちこまれる、自己メタプログラマーの姿勢の中にある。いうまでもなく、汚れのない純粋な本質は、こうした二分法をもたない。宇宙的愛はえこひいきをしない。宇宙愛は、その行為者を通じ、明確に、永遠に、逆戻りできないものとして伝えられるのである。

レベル48について、私が他のすべてのレベルの基本的な概念を説明している時、私は48のレベルで機能している。解釈学的な教えは、レベル48の基本的な機能である。ありうべき状態のスペクトルの両端を図示したり、私自身の生命コンピュータにおいて、自分が体験したことのある制御システムを示したりすることによって私が望んでいるのは、あなたがたが、自分自身の生命コンピュータの機能を分析するのを助けることである。あなたがたの生命コンピュータで、こうした概念その他を取り入れ、自分自身の言葉で、48の統合を行えばよかろう。もし、私がここで使っている言葉がピンとこないなら、『人間の生命コンピュータにおけるプログラミングとメタプログラミング』やその他の、こうしたメタモデルを設定するのに必要な概念を提供してくれる本を読む

ことをお勧めする。

私の人間生命コンピュータによれば、サトリに向かう道には、頭脳トリップや知的な道、つまり、愛の道であるバクティ・ヨーガ、行為の道であるカルマ・ヨーガ、エネルギーの道であるタントラ・ヨーガ、瞑想の道、禪の道といったものとは対照的な理解の道であるジュニヤーナ・ヨーガの道がある。レベル48の道は、生命コンピュータを明晰にし、48以上や以下のレベルに関する視点を明確にし、機能するために必要な明白な前提をもつことを可能にするものである。そうすれば、人は、自我のメタプログラミングの力を減少させ、自己メタプログラミングの力を増大させ、本質のメタプログラミングの方へ移動しはじめることができるのだ。

こうして、48において、私(私の自己メタプログラマー)は、あなた(あなたの自己メタプログラマー)に話しかけ、私やあなたの自己メタプログラマーを48以上のレベルの肯定的状態へと押し上げるため、本書に記されているアプローチ全体を、私の全体的メタプログラミングの一部として提供するのである。そして本書を執筆し、こうしたことを読者に述べることが、私を、基本的な専門家の状態である次の+24の状態に導いていく。